

となりのファーマー

／8 NPO法人・元気ファーマいながわ（兵庫県猪名川町） ／下 シニア結束、休耕地に息吹

毎日新聞 2016年11月15日 大阪夕刊

団塊の世代のシニア

農林業 めっちゃ関西 食 ライフ



いながわまつりで元気ファーマの屋台は大にぎわい。野菜が飛ぶように売れていった
=兵庫県猪名川町で2016年11月3日、松井宏員撮影

[PR]

たちが、生きがいづくりのために野菜などを栽培する兵庫県猪名川町の「元気ファーマいながわ」の活動を、前回に続いて紹介する。

3日、猪名川町で開催された「いながわまつり」で、販売前から元気ファーマの屋台には約100人ももの長蛇の列ができた。目当ては新鮮な野菜だ。高騰の折から例年以上に人気を集め、100～200円という安さもあって、キャベツやレタスなど葉物を中心に飛ぶように売れ、1時間もたたずに完売した。てんてこ舞いしながらも、メンバーの皆さんは満足そう。うれしいことがもう一つ。会場で行われた品評会で、大根が表彰されたのだ。理事長の秋沢亮一さん（69）は「けっこうええもんを作るようになってきてるって褒められました。下手でも続けてたら」と破顔した。

町主催の「シニアファーマー養成講座」の受講生が集まって、2008年から農園を始めて8年。今や猪名川町の名物になりつつあるが、この間、一筋縄でいくはずもなかった。まず直面したのは地元農家との関係だった。当初からのメンバーの今田勝之さん（74）は「農業用水の使い方とか、畑のあぜ道は通路ではないとか、僕らが知らない地域の慣習などがあって、よう怒られました」と振り返る。

よそ者が大勢で来るのだから、地元農家が警戒するのも無理はない。解決策は日々の積み重ねしかなかった。秋沢さんは「用水路の掃除を手伝ったり、とんど焼きなど地域の行事に参加したりと、農家との関係を作ることでした」と話す。動物よけの柵を水路沿いに立てる際は、堤がつぶれないように少し離すとか、草刈りも隣接する農家の農地までしておくとか、細かな心配りも欠かせない。そうやって今では「農家の人『わしらよりうまいこと作っとる』と言ってくれたり、相談に乗ってくれたり。そこまで信用を得た」と今田さんは晴れやかな表情だ。



元気ファーマの屋台には長蛇の列＝兵庫県猪名川町で2016年11月3日、松井宏員撮影

台風で川があふれ、農園が全滅したこともあった。イノシシや鹿、猿、アライグマに川からやって来るヌートリアなど「猪名川動物園かいうくらい出てくる」という野生動物による獣害にも悩まされる。「今も失敗の方が多いです」と今田さんは言うが、どうも失敗も楽しんでいるフシがある。失敗を糧に結束も強まっただろう、と笑顔で軽やかに農作業をこなすシニアの皆さんを見て思った。

農園は2カ所。農村部の南田原地区と、道の駅いながわの近くの万善地区にある。どちらも借りた休耕地で、竹の根を抜き草を刈り、耕すところからのスタートだった。万善の農園では溝口秀樹さん（73）が迎えてくれた。こちらには交流用の農園があり、障害者の人たちが植えたサツマイモやサトイモが育っていた。阪神間の子もたちが農業を体験したり、少年野球の子もたちがジャガイモを栽培したりもしている。「土を初めて触る子ばかり。ジャガイモが土の中にできるの知らない。収穫した野菜でバーベキューをすると喜びますよ」



9月にメンバー全員が集まってサツマイモ掘りに汗を流した。2カ所の農園に分かれているので、全員が顔を合わせる機会は貴重だそう＝元気ファーマいながわ提供

少年野球チームの監督の緒方光地さんは「元気ファーマー川柳」を詠む。監督と農業、どっちが難しいですか？と聞くと「こっちは手をかけただけ育つけど……」。作品を紹介すると――「野菜ラブ世話する俺を裏切らず」「勤務先 畑と書いた職業欄」「日に当たり野菜と同じ元気だぞ」。ユーモアとペーソスがにじむ。実に人材が豊富だ。

住宅地と農村が隣接した環境で、仕事をひいたシニアと作り手のない休耕地がうまくマッチングしている。「高齢者の生きがいや健康、地域の活性化……農業には一石何鳥もの要素があると思います。人間関係が広がったし、地域のことをよく知るようになった」と秋沢さん。双方の仲介や農地を借りるための煩雑な手続きの簡素化などが整備されれば、これからの農業の新しいスタイルになるのではないだろうか。〈文・写真 松井宏員／タイトルイラスト・布川侑己〉 = 第3火曜掲載

◆農園メモ

NPO法人 元気ファーマいながわ

メンバーは猪名川町や近郊の人たち。年会費1万2000円、入会金1万円。道の駅いながわでは、「元気ファーマ」のシールを貼った野菜が販売されている。問い合わせは秋沢さん（072・766・2307）。